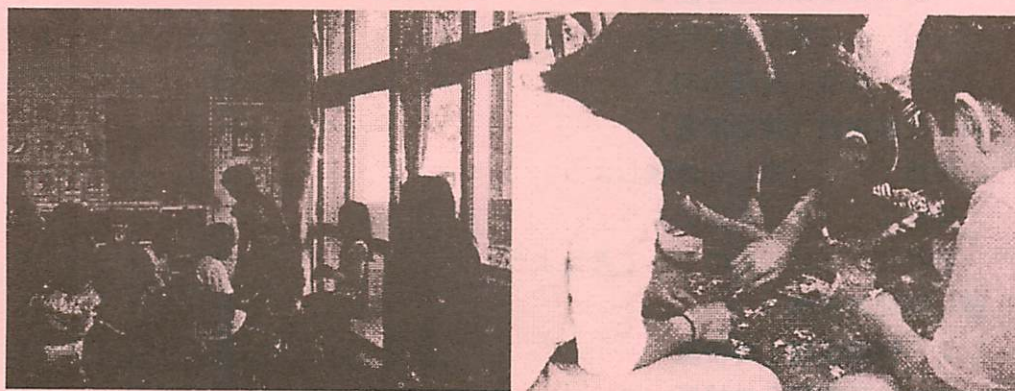
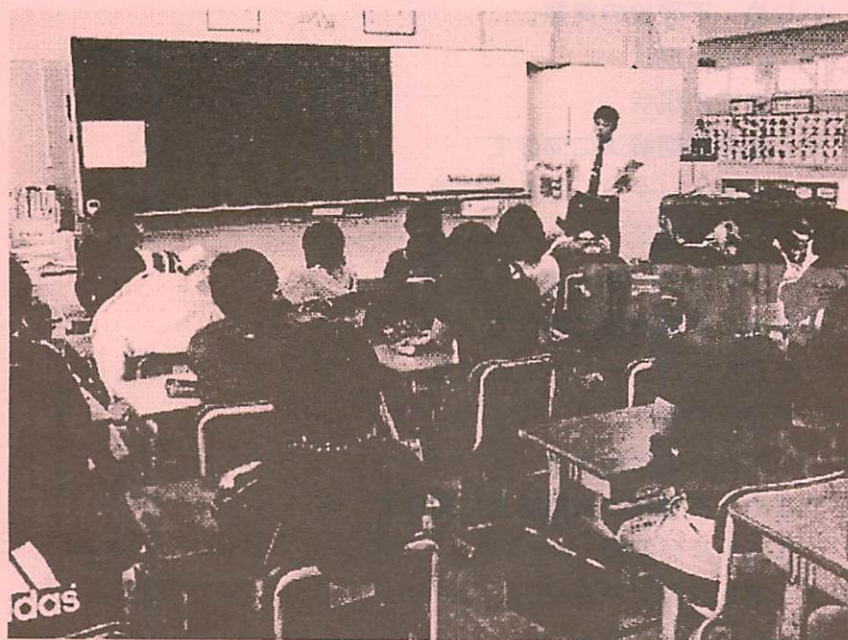


(小学校 学級活動)

互いの立場や個性を理解し他者と関わり合える子の育成

—いじめや不登校に関する積極的生徒指導の工夫を通して—



浦添市立神森小学校 仲間 一史



目次



I	テーマ設定理由	1
II	目指す子ども像	2
III	研究の目標	2
IV	研究仮説	2
1	基本仮説	2
2	作業仮説	2
V	研究構想図	2
VI	研究内容	3
1	いじめ・不登校の実態	3
(1)	いじめの現状	3
(2)	不登校の現状	4
2	いじめの早期解決に向けて	5
(1)	いじめのパターンとその特徴	5
(2)	いじめの背景	5
(3)	いじめへの対処方法	5
3	不登校の早期解決に向けて	6
(1)	不登校のパターンとその特徴	6
(2)	不登校の背景	6
(3)	不登校への対処方法	7
4	いじめ・不登校の未然防止に向けて	8
(1)	詳細な実態把握	8
(2)	心癒しへのアプローチ	11
(3)	EQの向上を図る	12
(4)	心に響く資料作成	13
(5)	教師の実践力向上	13
VII	授業実践（検証授業）	14
実践1	「心癒しを体験しよう」	14
実践2	「EQを高めよう」	15
実践3	「いじめについて考えよう」	16
VIII	研究の考察	18
1	作業仮説1の検証	18
2	作業仮説2の検証	19
IX	研究の成果と課題	19
1	成果	19
2	課題	19
	おわりに	20
	参考資料・引用文献	20

互いの立場や個性を理解し他者と関わり合える子の育成

—— いじめや不登校に関する積極的生徒指導の工夫を通して ——

浦添市立神森小学校 仲間 一史

【要 約】

本研究は、いじめや不登校に対する積極的生徒指導方法の工夫を通して、互いの立場や個性を理解し他者と関わり合える子の育成を目指した授業づくりを試みたものである。実態把握や理論研究を深める中で、いじめや不登校の早期解決や未然防止に向けた様々な方策の手がかりが得られ、さらに、作成した指導資料を活用した授業を展開したことにより、他者とのよりよい関わり方を意識づけることができた。

キーワード □実態把握・原因分析 □心癒しとEQ力 □指導資料作成 □積極的生徒指導

1 テーマ設定理由

文部科学省の「平成18年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」(下記表)で、いじめや不登校の深刻な実態が確認された。

表1 いじめ・不登校の発生(認知)件数
(いじめの発生件数) (不登校の発生件数)

	いじめの発生件数			不登校の発生件数		
	全国	県	市	全国	県	市
平成17年度	17,881	328	71	122,287	1,564	171
平成18年度	124,898	768	32	126,764	1,625	187

5月に5学年児童(35名)を対象に行った意識調査で「いじめられたことがある」と回答した児童が11名(約30%)存在することや、不登校傾向にある児童も複数存在していることから、「いじめ」や「不登校」は児童にとっても身近な問題である。

県教育委員会は平成19年度の指導努力事項の中で、「生命や人権の尊重」を根底に「子どもの居場所づくり」「人間関係の育成」などを通して、いじめや不登校の未然防止に努めるよう促している。

本市においても、教育相談員やスクールカウンセラーの派遣、各機関の実務者会やケース会議等、数年来の取り組みによって成果を得ているものの、不登校件数の増加から厳しい現状が伺える。

このように様々な取り組みがなされているにもかかわらず、いじめや不登校が後を絶たないのはなぜだろうか。文部科学省は、ホームページの中で、いじめは、不満やストレスを基にして、それに対する適切な対処方法の学習不足と個人の精神状態の不安定さが重なり合って発生しているとしている。適切な行動判断は、様々な生活体験や学習等で得られる

もので、いじめや不登校は、その欠如の現れの一つでもあると思われる。

したがって、いじめや不登校の早期解決や未然防止には、様々な不満やストレスに対する適切な対処方法を学ばせ、正しく判断できる力を身につけさせることが重要だと思われる。そのためには、より客観的な実態把握と理論研究を基にした指導資料を作成し、各自が内発的に行動できるよう支援していくことが必要である。

また、いじめや不登校は、様々な人的関わり合いの中で発生しているため、学級内においても、よりよい人間関係を育む環境作りが必要である。よりよい人間関係とは、相手の立場や個性を尊重し関わり合える関係である。学級集団でその関係を構築する方法としては、心の壁を取り除き素直な気持ちを表現できるように構成されたエンカウンターが有効と思われる。そのエクササイズの内容を工夫し取り組んでいくことで、徐々に心が癒され、学級内での所属感や安心感を育み、いじめや不登校を早期解決、未然防止へと導いていけるのではないかと考え本テーマを設定した。

以上のことから、本研究では、「いじめや不登校に関する実態把握や理論研究を基にした指導資料作成を行うこと」「その資料を活用しエンカウンター等を工夫した学級活動を充実させること」で、互いの立場や個性を理解し他者と関わり合える児童が育成でき、いじめや不登校の早期解決や未然防止が図れるのではないかと考え本テーマを設定した。

II 目指す子ども像

互いの立場や個性を理解し他者と関わり合える子

III 研究の目標

いじめや不登校の早期解決や未然防止に向けた積極的生徒指導方法の確立

IV 研究仮説

1 基本仮説

いじめや不登校に関する実態把握や理論研究を基にした指導資料を作成し活用するとともに学級活動を工夫し充実させることで、互いの立場や個性を理解し他者と関わり合える子が育ち

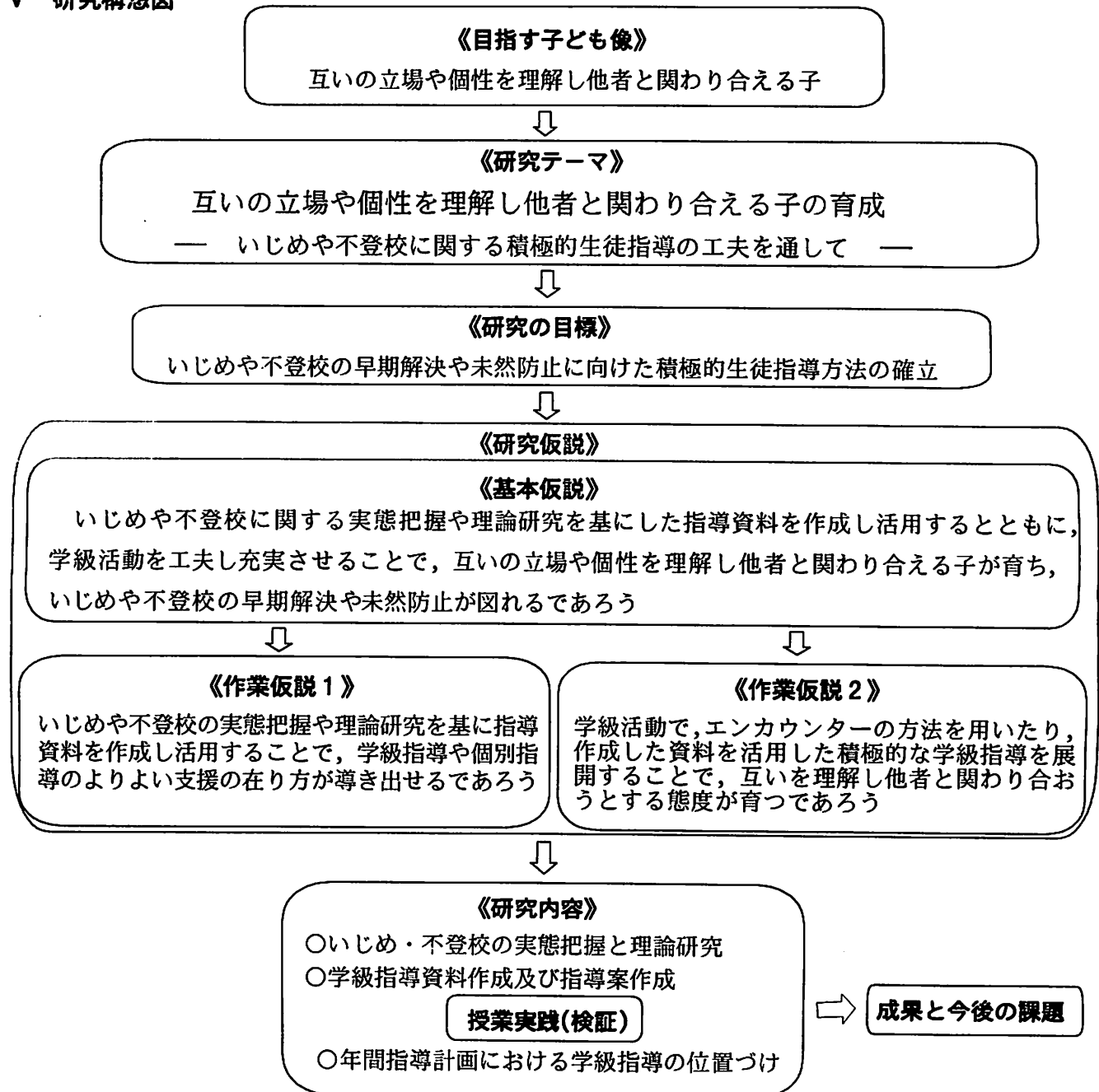
いじめや不登校の早期解決や未然防止が図れるであろう。

2 作業仮説

(1) いじめや不登校の実態把握や理論研究を基に指導資料を作成し活用することで、学級指導や個別指導のよりよい支援の在り方が導き出せるであろう。

(2) 学級活動で、エンカウンターの方法を用いたり、作成した資料を活用した積極的な学級指導を展開することで、互いを理解し他者と関わり合おうとする態度が育つであろう。

V 研究構想図



VI 研究内容

1 いじめ・不登校の実態

(1) いじめの現状

いじめは、「自分より弱い者に対して一方的に、身体的・心理的な攻撃を加え相手が深刻な苦痛を感じているもの」と定義され、毎年、文部科学省による実態調査がなされていたが、昨年度から調査基準が見直され「本人が認めたもの」も含めての調査となった。その結果、明らかになった全国の実態(表2)を見ると、児童生徒1000人当たりの認知件数が最も多いのは熊本で以下、福井、岐阜、石川、大分となり、逆に、最も少ないのは鳥取で、和歌山、広島、福島、滋賀などがそれに次いでいる。沖縄(3.7)は全国平均をかなり下回る数値を示している。

表2 1000人当たりのいじめの認知件数(17年度)

県名(件数)	県名(件数)
1 北海道(13.0)	25 滋賀(2.9)
2 青森(7.0)	26 京都(3.2)
3 岩手(9.5)	27 大阪(4.3)
4 宮城(9.0)	28 兵庫(3.4)
5 秋田(10.4)	29 奈良(6.6)
6 山形(6.8)	30 和歌山(2.5)
7 福島(2.8)	31 鳥取(2.1)
8 茨城(9.8)	32 島根(6.3)
9 栃木(8.2)	33 岡山(8.3)
10 群馬(9.7)	34 広島(2.8)
11 埼玉(4.8)	35 山口(9.7)
12 千葉(13.4)	36 徳島(6.2)
13 東京(6.5)	37 香川(8.9)
14 神奈川(6.5)	38 愛媛(10.8)
15 新潟(5.6)	39 高知(6.0)
16 富山(12.1)	40 福岡(3.5)
17 石川(26.7)	41 佐賀(3.5)
18 福井(36.2)	42 長崎(15.0)
19 山梨(6.3)	43 熊本(50.3)
20 長野(7.6)	44 大分(20.4)
21 岐阜(30.1)	45 宮崎(4.4)
22 静岡(5.3)	46 鹿児島(6.6)
23 愛知(12.6)	47 沖縄(3.7)
24 三重(4.3)	全国平均(8.7)

いじめの解消率(表3)は、17年度が約90%、18年度が約81%を示し様々な取り組みによる成果が見られる。

しかし、その一方で、毎年、多発しているという現状からは、この問題の根深さと対応の困難さが伺える。

表3 いじめの発生件数と解消状況

* () はその割合(%)を示す

	発生件数	解消数	未解消数
17年度	20,143	18,245 (90.6)	1,898 (9.4)
18年度	124,898	101,089 (81.0)	23,809 (19.0)

次に、その態様(表4)では、「冷やかし・からかい・脅し」が認知件数の7割弱を占め、次いで「仲間はずれ」「暴力」「持ち物隠し」等となっている。

また、インターネットや携帯電話を介したメールによるいじめも大きな問題として取りざたされている。身近な行動から目に見えない誹謗中傷まで、いじめの態様も広がり、その対応の難しさが伺える。

表4 いじめの態様(複数回答)

冷やかし・からかい・脅し	66.3%
仲間はずれ・集団無視	25.4%
軽い暴力	18.2%
ひどい暴力	4.9%
持ち物隠し	10.4%
たかり	2.4%
パソコンや携帯電話で誹謗中傷	3.9%
その他	4.0%

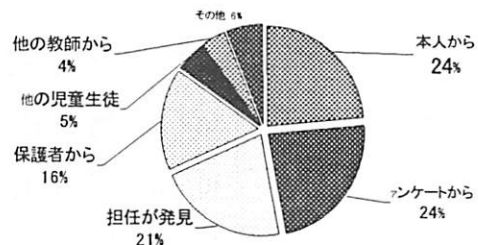


図1 いじめ発見のきっかけ

次に、いじめの発見のきっかけ(図1)を見ると、最も多いのは「本人からの訴え」と「アンケートなどの調査から」で、「担任が発見」は約2割となっている。

このことから、早期発見には、担任の観察だけでなく、児童や親と容易に対話できる関係づくりも大切であると言える。また、周囲の声やアンケートの活用なども、実態把握や早期発見には有効であることがわかる。

浦添市では、発生件数(表5)が激減している。実務者会議やケース会議等、個別の支援体制が充実してきたためと思われる。しかし、数値化されたものは、氷山の一角に過ぎないと指摘する

声もある。日々変化する子どもの人間関係を観察する中で、いじめが連鎖的に継続して発生している様子を見ると、このような実績にも樂觀できない。

表5 浦添市の小中学校におけるいじめの発生件数

* () は児童生徒1000人当たりの数

	小学校	中学校	小中計
平成17年度	14 (1.7)	57 (24)	71 (5.6)
平成18年度	6 (0.7)	32 (5.9)	32 (2.5)

(2) 不登校の現状

「年間に30日以上欠席している者」を不登校児童生徒として調査し、県別にまとめたものが表6である。

表6 1000人当たりの不登校児童生徒数(11年度)

県名 (件数)	県名 (件数)
1 北海道 (9.2)	25 滋賀 (13.9)
2 青森 (11.9)	26 京都 (12.1)
3 岩手 (10.1)	27 大阪 (12.7)
4 宮城 (12.5)	28 兵庫 (10.7)
5 秋田 (8.7)	29 奈良 (13.0)
6 山形 (9.8)	30 和歌山 (14.7)
7 福島 (9.9)	31 鳥取 (11.2)
8 茨城 (11.4)	32 島根 (16.3)
9 栃木 (14.4)	33 岡山 (13.3)
10 群馬 (11.9)	34 広島 (13.1)
11 埼玉 (12.7)	35 山口 (12.4)
12 千葉 (10.3)	36 徳島 (11.5)
13 東京 (11.1)	37 香川 (11.0)
14 神奈川 (14.3)	38 愛媛 (8.1)
15 新潟 (11.0)	39 高知 (14.9)
16 富山 (11.3)	40 福岡 (11.6)
17 石川 (11.0)	41 佐賀 (11.0)
18 福井 (10.5)	42 長崎 (9.6)
19 山梨 (13.2)	43 熊本 (10.0)
20 長野 (13.9)	44 大分 (11.7)
21 岐阜 (12.4)	45 宮崎 (8.3)
22 静岡 (11.5)	46 鹿児島 (10.1)
23 愛知 (12.2)	47 沖縄 (10.5)
24 三重 (12.0)	全国平均 (11.3)

これによると、全国各地ともおよそ60人から100人に1人の割合で不登校が発生していることがわかる。一学年に1人いることになる。沖縄は全国平均を下回っているが、最多の島根から最少の愛媛まで全国的にいじめ程の差異は見られない。

表7 浦添市の不登校児童生徒の発生件数

* () は1000人当たりの発生件数

	小中合計	小学校	中学校
17年度	166(12.2)	41 (5.1)	125 (27.8)
18年度	187(14.7)	50 (6.0)	137 (31.1)

浦添市では、表7が示すように全国平均や県平均を上回っている。特に、中学校では3倍近い発生率で深刻な現状である。

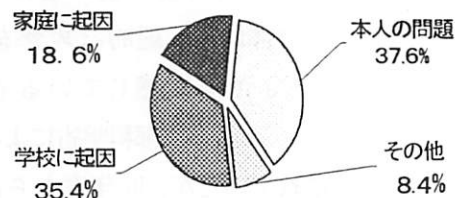


図2 不登校の発生原因

不登校になったきっかけ(図2)は、「情緒不安定など本人に関する問題」「学校生活での問題」「家庭生活での問題」の順となっている。友人関係や学業のこと、親子関係など様々な悩みを抱え登校できずにいる児童生徒が多くいることがわかる。

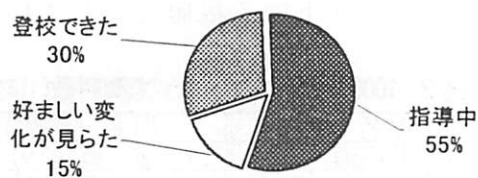


図3 不登校への指導の結果

それらの児童生徒の内、指導の結果(図3)「登校できた」あるいは「好ましい変化があった」のが約45%で、多くは不登校が継続している状態である。

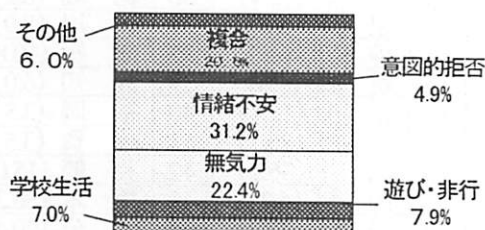


図4 不登校が継続している理由

その理由(図4)として、「情緒不安定」「無気力」などが多く上げられているように、本人の心の問題が解消できずに継続している様子が伺える。

また、前年度から不登校が継続している児童生徒(図5)が半数近くいることから、解決の難しさがわかる。

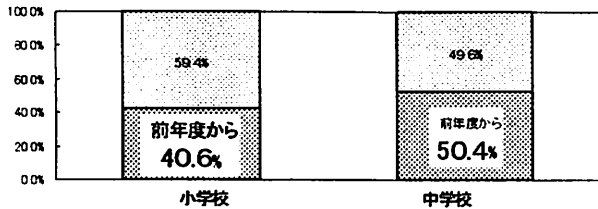


図5 前年度から継続している割合

さらに、不登校がきっかけで「非行」にはしる児童生徒も見られることから、早期発見と早期対応が大切である。

2 いじめの早期解決に向けて

(1) いじめのパターンとその特徴

文部科学省はホームページ内「いじめに対するQ&A」で、いじめのパターンを「猿山のボス争い型」「醜いアヒルの子型」「犯罪型」の3つに分け対処法を紹介している。

①「猿山のボス争い型」について

いわゆる「リーダー争い」のことで、学年当初に起こることが多い。この場合は、互いに交流していく内に自然解決に至ることもあり、児童同士で解決できるよう支援していくのが望ましいが深刻度によって教師が介入すべきかを判断し対応していくことが大切である。

②「醜いアヒルの子型」について

異質なものをターゲットとして排除し、集団の結びつきを強めようとするもので、本人の特徴や親の職業、出身地、学力、体力、障害などを元に次々にターゲットを替えながら生まれ続ける性質がある。なかなか表面化しないものや、リーダーが中心になっている場合のものもあり、問題の把握と対応に時間を要する。

③「犯罪型」いじめについて

恐喝、暴行、万引きの強制など法的にも犯罪とされるもので、警察や児童相談所等へ速やかに連絡し、連携して対応していく必要がある。

(2) いじめの背景

次に、いじめはどのようにして起こるのか考えてみたい。(図6参照)

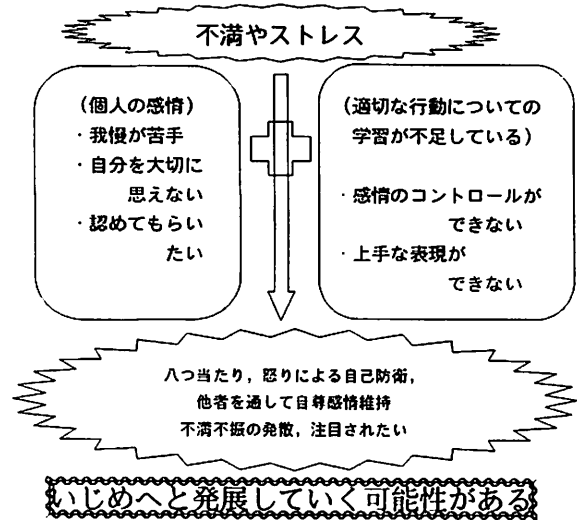


図6 いじめの背景

文科省ホームページによると、発生の根底にあるのは「不満やストレス」である。つまり、誰にでも加害者となりうる素因があるのである。しかし、多くは、幼少時からの生活体験の中で獲得した適切な対応の方法と、安定した感情でいることで、不適切な行動へ発展せずにいられるという。そのような学習が不足していたり、その時の感情が不安定の場合は、不適切な行動をとるようになり、次第に「いじめ」へと発展していくということである。

(3) いじめへの対処方法

いじめは、ターゲットになった子どもの心身に大きな影響を与えることから、暴力として理解し対応する必要があると文部科学省はホームページ上で示している。

その対処法を多くのカウンセラーの実践に学ぶと、被害者の安全を最大限に保障した上で加害者の行動の背景にあるものを考え適切な行動への移行処置を行うことが重要のように思える。場合によっては、子どもの幼少期に遡って原因を探る必要がある。幼少期の体験から生まれる感情は意識的あるいは無意識のうちに蓄積され、その子の

特徴的な行動として表れてくると考えられる。不適切な行動の背景には、そのような感情が影響していることも多いという。

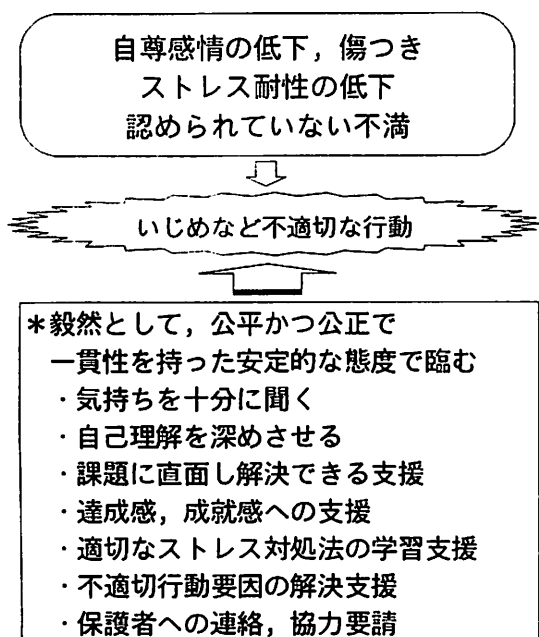


図7 いじめへの対応

したがって、実態把握を元に、被害者のみならず加害者をも含めた心の治療を行うことと、不満やストレスに対する適切な対処方法を学習させることを通して問題解決と再発防止につなげられると考えられる。

その際、教師は、常に公平かつ公正で一貫性を持った安定的態度で問題解決に取り組むことが重要である。(図7参照)

3 不登校の早期解決に向けて

(1) 不登校のパターンとその特徴

不登校パターンを、「問題行動調査報告書」における「不登校の態様」を参考に、以下のようにとまとめた。

①家庭環境トラブル型

親が、子どもと上手く関われない或いは関わりを拒否している場合に当たり、全国的には全件数の18.5%の発生率である。親子兄弟関係など子どもの発育過程に原因があり、親へのカウンセリングによって解決した例もあるが時間を要する。

②友人関係トラブル型

深刻ないじめや級友との不和によるもので、全件数の18.8%の発生率である。

この場合は、いじめへの対応と同様に実態把握を元にした対処方法の検討が必要である。教師主導で問題解決にあたることが望ましい。

③学校不適応型

学業不振、入学や進級時の不適応、クラブやきまり等への不適応などの場合で、全件数の15.1%の発生率である。

学業不振による怠学は、非行へ結びつくケースが多く、家庭訪問や手紙、電話等、常時連絡をとり合い本人との関わりを保ち続けることが欠かせない。

④ひきこもり型

情緒不安定や精神障害など、本人の心因的なものに起因し登校できない状態で不登校の中で最も多いパターンに当たり、全国で46,320人(全件数の31.2%)の児童生徒が含まれる。

本人と直接関わるのが難しく、親と協力して取り組んでいながら関係専門機関へも支援を依頼し、連携して解決を図るのが望ましい。

⑤その他の長期欠席

病気などの事情のため登校できずにいる状態で、お知らせや電話連絡、家庭訪問等によって関わりを継続し、支援する必要がある。

(2) 不登校の背景 (図8参照)

現代の不登校の背景には様々な要因が考えられるが、それらが複雑に絡み合って解決の困難さを招いている感がある。子どもの人格形成の未熟さ、学力偏重の歪み、家庭教育力の低下、情報化社会の影響、地域社会の弱体化、学校の指導力低下による父母の不信感と、子どもが不登校に陥る要素は数多く存在する。

子どもは人格形成が成熟されないまま思春期を迎え、学力社会は思春期の生徒の心身の健全な発達を妨げ、多忙の日々に親子の会話は満たされずに躰は疎かになり、パソコンを介して子どもは一人遊びを覚え自分勝手な性格を形成し、大人は情報に踊らされ、家族は近所づきあいから逃れて過ごし、学校は多忙で保護者の期待に添えない。現代社会は、このように、誰もが不登校に陥る要素があり、大人は常に子どもの変容に敏感でなければならぬのである。

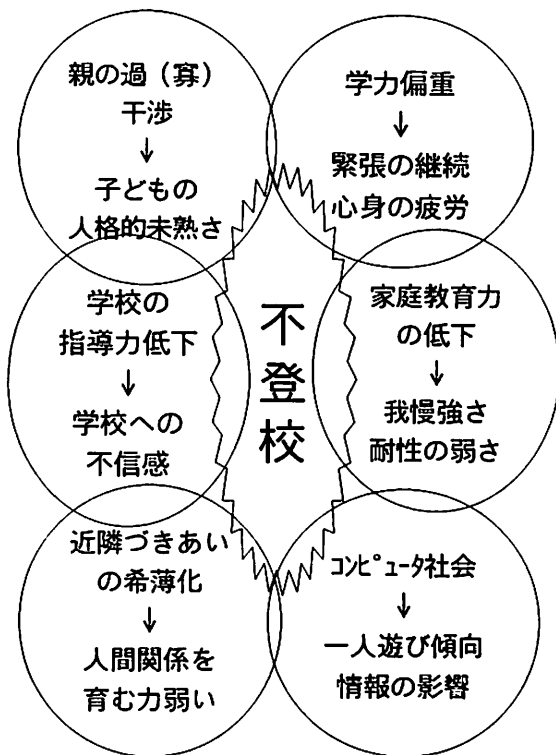


図8 不登校の背景

(3) 不登校への対処法

何らかの事情で不登校になった者を再登校させるには、発生原因にあった対処方法をとることが必要である。

そこで、それぞれのパターンへの対処方法を様々な事例を元に考えてみた。

①家庭環境トラブル型の場合

保護者との信頼関係が構築できるかが最も重要である。互いの立場から子どもの良さを見つけて褒め合うことでさらに

絆を深めていくことが望ましい。子どもの心に安心と自信が蓄積されれば登校意欲も高まると思われる。

②友人関係トラブル型

いじめと同様に、詳細な実態把握で対処方法を検討し、親や本人と慎重に相談した上でケース毎に、教師主導で進めることが望ましい。

可能な限り安全を保障し、どの子どもも好ましい人間関係が形成できるように学級活動を計画して進めていく必要がある。双方の子どもの事後指導への配慮は欠かせない。問題が深刻な場合は、無理に登校させずに、時間をかけて取り組むようにする。関係機関の支援も有効である。

③学校不応適型の場合

教師の働きかけによって、好転する可能性大である。適切な対処法を子どもと共に考える姿勢で臨むとよい。

焦らず取り組むために、保護者と話し合い理解を得ることも大切である。

④ひきこもり型の場合

引きこもるきっかけが聞き出せれば対処方法もわかるが、本人と面談できない、あるいは保護者が応じさせない場合は困難である。その場合は、教育相談員やスクールカウンセラー、関係機関と連携して解決の方法を探るのが望ましい。

心理療法家の網谷由香利は、子どもの心と親の心には対応関係があるとして、親のカウンセリングを通して子どもの問題を親の代まで遡って心理治療を行うことが解決には効果的であるという。

⑤その他の長期欠席の場合

いつ、本人が登校してもいいような準備をしておく必要がある。障害が原因の場合は、校長や委員会とも相談した上で、必要な設備を整えなければならない。また、本人の登校意欲を喚起する日記やお便り等での情報伝達も大切である。

4 いじめ・不登校の未然防止に向けて

問題行動を未然に防ぐには、安定した感情と好ましい人間関係の形成、適切な行動判断力育成等様々な取り組みが不可欠である。そのための方策を考えてみた。

(1) 詳細な実態把握

学級児童の人間関係、家庭環境、学習状況や課外活動、部活動での様子、不満やストレスの具合など、多角的・多面的に捉え、把握することが未然防止への第一歩である。そこで、実態把握の方法を考えてみることにした。

表9 「ノンバーバル行動」観察記録表の例

項目	記録
視線	強い 弱い うつむき
表情	明 普通 暗
姿勢	良 普通 よくない
体つき	やせ 中肉 太い
声の質	太い 細い 高い 低い
動作	機敏 普通 遅い
ジェスチャー	大 普通 小 なし
髪型	長 短 清楚 粗
爪	長 短 清楚 粗
服装	整 不整 清楚 粗
話し方	丁寧 乱 速 遅
聞き方	見て 見ない
体臭	有 無
交友関係	多 普通 少 疎
趣味	有 無
装飾品	有 無
学用品	適材適量 不適當
整理整頓	美整 普整 不整
食事	単食 混食 偏食
その他	

子どもの問題の認知の約6割が表情からという指摘もあることから、まず、観察により実態把握を試みるのも一つの方法である。

「目は口ほどにものを言う」というように、人の心の動きは動作や表情に出やすいことから、心の動きを行動から読み取る「ノンバーバル」の認知力を活用してみる。(表9参照)

子どもの動作や仕草、口癖、集団の中での表情、言葉遣い、持ち物、服装、髪型、おしゃれなど、様々な観点から観察し、気になる子へは、面談するなど早期の問題把握に努める。教師は、日常的に児童生徒に対して観察の眼差しを向けているが、見過ごしていることも多い。見過ごしをなるべくなくすために観察の視点を予め設定し、記録しながら行うことが望ましい。

第二に、実態把握に有効なものとして「アンケート」調査がある。

いじめや不登校については、本人の心の中の日に見えない部分に働きかけなければならないので、心の中の様子を客観的に推し図る資料を作成し、詳細に実態把握を行うようにしたい。

表0は、「心理テスト法入門」(日本文化科学社発行)に紹介された心理テストの中で、1単位時間内で実施可能な小学生対象のものを抜粋したものである。

それぞれの目的に最も合った検査方法を選定し実施していくことが重要であるが、子どもの状態や天気などを考慮することも欠かせない。

表10 学級の実態把握に活用できる心理テスト

<ul style="list-style-type: none"> ・ 幼児・児童性格診断検査 (全) ・ 不安傾向診断検査 (4年以上) ・ 自主性診断テスト (5年以上) ・ 親子関係診断検査 (4年以上) ・ PCR 親子関係検査A型 (全) ・ 集団 TAT 検査 (5年以上) ・ 新版学習適応性検査 (全) ・ 小児 AN-エゴグラム (全) ・ 学級適応診断検査 (4年以上) ・ 本明・ギルフォード性格検査 (4年以上) ・ 学級診断尺度 Q-U (3年以上) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ カラーピラミッド性格検査 (全) ・ 新版 S-M 社会生活能力検査 (全) ・ 日常生活動作テスト (全) ・ 教研式 P U P I L (4年以上) ・ 児童の意見・態度・悩み調査 (3年以上) ・ 教研式 POEM 生徒理解カード (全) ・ 基本的欲求検査 (4年以上) ・ 基本的生活習慣検査 (全) ・ 新版道徳性検査 HUMAN (全) ・ HEART 道徳性診断検査 (全) ・ パブリックヘルセクター版ストライクバントリー (全)
--	---

また、既成の様々な検査内容や分析方法を参考に、独自に作成したアンケートを活用していくのもよい。

表11「心のアンケート」は、今年度当初に学級児童を対象に行ったアンケートである。

このアンケートは、「所属感」「向上意欲」「ストレス耐性」「適正行動力」「悩み度・解決力」を測ることを目的として作成し実施した。

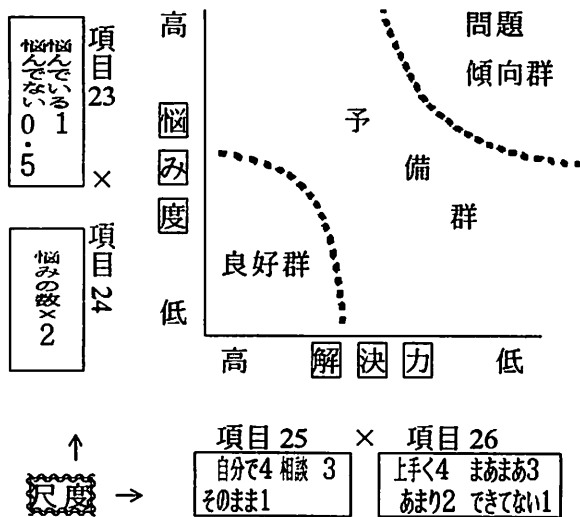
検査結果から、個人データを得点化して集計し、グラフの縦軸・横軸の数値に合わせて各自の位置を表すことで、その項目に添った学級の様子を読み取ることができ、指導の方法探ることができた。

図9は、活用方法の具体例であるが、集計されたデータの活用方法を工夫し、詳細な実態把握を図ることが重要である。

表11 心のアンケート

* <u>所属感</u>	名前 ()
1. あなたは、友だちとおしゃべりすることは好きですか (いい・はい)	
2. あなたは、友だちと運動することは好きですか (いい・はい)	
3. あなたは、どのくらいの人数でよく遊びますか (2~3人、4~5人、6人以上)	
4. あなたと親しい友だちは何人いますか (いない、1人、2人、3人、4人以上)	
5. 仲間はずれにされたことがある(おいて) ①よくあてはまる ②まあまああてはまる ③あまりあてはまらない ④あてはまらない	
6. いじめられたことがある(いじめられている) ①よくあてはまる ②まあまああてはまる ③あまりあてはまらない ④あてはまらない	
7. 学校は楽しい ①あてはまらない ②あまりあてはまらない ③まあまああてはまる ④よくあてはまる	
* <u>向上意欲</u>	
8. 自分の考えをよく言う ①言わない ②あまり言わない方 ③まあまあ言う方 ④よく言う	
9. 友達の話はよく聞いている . . . ①できていない ②あまりできていない ③まあまあできている ④上手くできている	
10. 友達の気持ちを考えている . . . ①できていない ②あまりできていない ③まあまあできている ④上手くできている	
11. 友達と仲良く遊んでいる . . . ①できていない ②あまりできていない ③まあまあできている ④上手くできている	
* <u>ストレス耐性</u>	
12. 何かうまくいかないといらいらする ①よくあてはまる ②まあまああてはまる ③あまりあてはまらない ④あてはまらない	
13. よくおこる ①よくあてはまる ②まあまああてはまる ③あまりあてはまらない ④あてはまらない	
14. よく泣く ①よくあてはまる ②まあまああてはまる ③あまりあてはまらない ④あてはまらない	
15. よくけんかをする ①よくあてはまる ②まあまああてはまる ③あまりあてはまらない ④あてはまらない	
16. ものを乱暴にあつかう ①よくあてはまる ②まあまああてはまる ③あまりあてはまらない ④あてはまらない	
17. 文字を乱暴に書く ①よくあてはまる ②まあまああてはまる ③あまりあてはまらない ④あてはまらない	
* <u>適切行動力</u>	
18. いろいろなルールを守っている ①あてはまらない ②あまりあてはまらない ③まあまああてはまる ④よくあてはまる	
19. 掃除や当番活動は一生懸命やる ①あてはまらない ②あまりあてはまらない ③まあまああてはまる ④よくあてはまる	
20. 給食は残さず食べている . . . ①あてはまらない ②あまりあてはまらない ③まあまああてはまる ④よくあてはまる	
21. 仲間はずれにしたことがある(している) ①よくあてはまる ②まあまああてはまる ③あまりあてはまらない ④あてはまらない	
22. いじめたことがある(いじめている) ①よくあてはまる ②まあまああてはまる ③あまりあてはまらない ④あてはまらない	
* <u>悩み度・解決力</u>	
23. 今、悩んでいることがありますか (はい、いいえ)	
24. 主にどんなことで悩みますか(いくつ選んでもかまいません) 友だち 勉強 親 兄弟 体 おしゃれ その他 ()	
25. 悩んだとき、いつもどうしていますか . . . ①そのまま ②誰かに相談している ③自分で解決する (その理由) ()	
26. 悩みを上手く解決できていますか ①できていない ②あまりできていない ③まあまあできている ④上手くできている	
27. いじめをなくすにはどうすればよいと思いますか	
28. みんなが学校生活を楽しく過ごすためにどうすることが大切だと思いますか	
* 26までの各項目への回答を点数化し、表にまとめて分析を行う。	
27、28は、学級指導に使用する資料に活用する。	

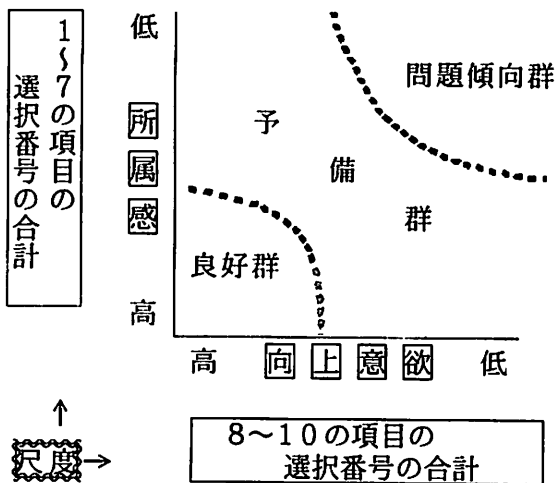
(1) 悩み度と解決力



* 縦軸に悩み度，横軸に解決力をそれぞれの尺度に従って算出した数値にあてはめて，グラフの中に記入していく。

悩み度が低く解決力が高い程良好，その逆は問題傾向にあるとし，学級全体の傾向を見て，教育相談の内容や時期等への参考資料として活用できる。

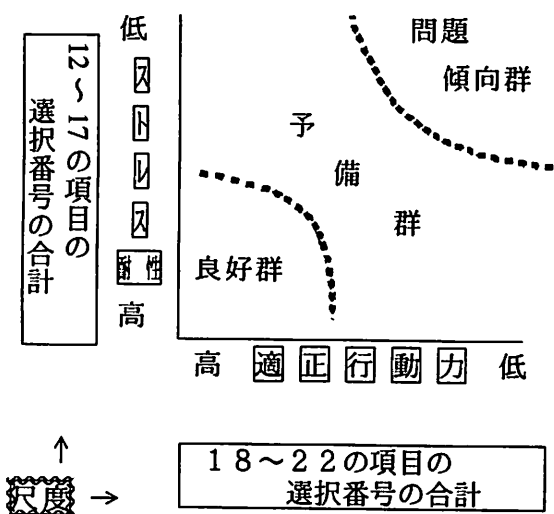
(2) 所属感と向上意欲



* 縦軸に所属感，横軸に向上意欲を，それぞれの尺度に添って算出した数値にあてはめて，記入していく。

所属感，向上意欲ともに高い児童は良好，その逆は問題傾向にあるとし，学級全体の傾向を見て，エンカウンター等の集団づくりに取り組んだり日常の対話を通じた支援のあり方を講ずる資料として活用できる。

(3) ストレス耐性と適正行動力



* 縦軸にストレス耐性，横軸に適正行動力を，それぞれの尺度に添って算出した数値にあてはめて記入していく。

両項目ともに高い児童は良好その逆は問題傾向にあるとし，生活・学習グループの編成やEQ向上に向けた学級指導のあり方を探る等の資料として活用できる。

図9 アンケート集計の活用例

(2) 心癒しへのアプローチ

昨年度、全国の小中高で371人の自殺者が出た。内いじめによるものは6件報告されている。毎年繰り返されるいじめの悲劇を、くい止めるためにはどうすればよいのだろうか。

「子どもを守り育てる体制づくりのための有識者会議」では、「いじめは、その根っこは小学校時代からあり、低学年からの適切な指導を行う」必要性を説いている。

また、同会議内「いじめをなくそう子ども会議」では、子どもとの信頼関係づくりや教師の対応、職員の指導体制、関係機関との連携について等、中高生生徒からの厳しい意見も出されている。

また、教育相談を多く手がけてきた木田恵子や山脇由貴子は、加害者と被害者共に、その背後にある家庭環境等にも治療の目を向け、カウンセリング等による双方の心の癒しの重要性を説いている。

さらに、教育カウンセラーの織田尚生は、いじめや不登校、社会や学校への不適應の背景には、幼少時の虐待や親との関わりが反映しているとし、過去の心癒しに取り組み、多くの子を復帰へと導き成果を上げている。

また、「健全な精神は健全な肉体に宿る」というスポーツの根本的概念から、心と体を一体として捉え、軽い運動を通して心身の緊張をほぐす(癒す)ことができると考えられている。

「動作療法」による心理治療を実践する医学博士の成瀬悟策は、この方法の心理療法への有効性を論じている。

以上のことから、未然防止に向けては、第一に、関係者それぞれの「心癒し」が必要だと考えられる。その方法として、近年、様々な実践例が示されている「エンカウンター」に着目し、エクササイズを工夫し学級活動に取り入れることで、各自の自尊心や有用感、所属感等の高まりが期待でき、誰とでも関わり合える学級集団の形成が実現できるのではないかと考えた。

エンカウンターについては、多くの実践例があり、学級の実態に合わせて授業に取り入れるようにするとよい。

表12は、学年当初から年度末まで、様々な場面で活用できるエクササイズを紹介したものである。

表12 構成グループエンカウンター実践例紹介

エクササイズ名	主な活用目的
1.私シリーズ	自己開示・他者理解
2.3つのお願い	// //
3.コラージュづくり	// //
4.双六トーク	// //
5.ダンシングペーパー	自己開示
6.よいところ探し	他者理解
7.アレンジビンゴ	他者理解・所属意識高揚
8.いろいろ目標壁新聞	協調性・所属意識高揚
9.人間イス	協調性・有用感・所属意識高揚
10.馬跳び競争	// //
11.パズル	// //
12.人間イス	// //
13.連想ゲーム	// //
14.ありがとうゲーム	他者理解・有用感・所属感高揚
15.うんそう屋さん	// //
16.○人○脚	// //
17.頭の体操	自己開示・有用感高揚
18.リズム遊び	自己開示・所属意識高揚

エンカウンターを実施する場合、ワークシートの活用、グルーピング等十分考慮しなければならない。安心して楽しめる雰囲気作りも成功の秘訣であるが、発言や行動を上手く導き出せなくても、方法を工夫し次に臨むという柔軟な対応も必要である。

そして、最も大切なのは、参加者の気持ちの変容をシェアリング(共有化)できるように活動の流れを構築することである。そのためには、学級の実態にあったエクササイズを選択し、活動の機会を逃すことなく取り入れることと、教師のリーダーシップのもとでリズムカルに進行していくことが重要だと思われる。

(3) E Qの向上を図る

いじめや不登校の背景には、家族や社会の複雑な問題が反映している。しかし、何よりも本人が、不満やストレスを上手に解消する方法や他者との関わりの中での適切な表現方法を習得できていないことが主要因になっていると思われる。

現代は、知的・合理的に物事を判断し評価している反面、感情的に行動する若年層への支援は満足とは言えない。メディアで報道される様々な現象を見ても、善悪の判断基準となる知識を身につけさせると共に、自己の感情をコントロールできる能力を高めていくことが重要なように思える。

これを、ピーター・サロベイやジョン・メイヤーはIQ（知能指数）に対してEI（こころの知性）として著書で述べている。後に、これは、「心の知能指数」（EQ）と呼ばれるようになったが、このEQと呼ばれる力がなければ、いかに知識を習得したとしてもそれを発揮できないことがあるという。

人間の能力発揮の差は、自制、熱意、忍耐、意欲などを含めたEQによるとするならば、その能力を高めることで、よりよい人間関係づくりが可能となるのではないか。

日本においてEQ研究を進める高山直は、EQを訓練によって高められるとし、家庭、学校、社会において訓練可能な例を示している。

それによると、EQ向上に向けて

- ①感情の識別（自他の感情を識別し表現する）
- ②感情の利用（最適な感情を生み出す・共感）
- ③感情の理解（感情の持つ特性を理解する）
- ④感情の調整（適切な行動への感情の調整）

の4つの側面から捉え取り組んでいくことが必要だという。これに学び、学級指導にも活用して取り組むことで、適正行動力を高めることができる考えた。

図10は、高山の「EQ開発の考え方」であるが、最も重要なことは、感情を常に意識し、自他の感情の特性を知ることにより、その上で、

感情の使い方を覚え、実践し習慣化してEQを伸ばしていく必要があると同氏は言う。

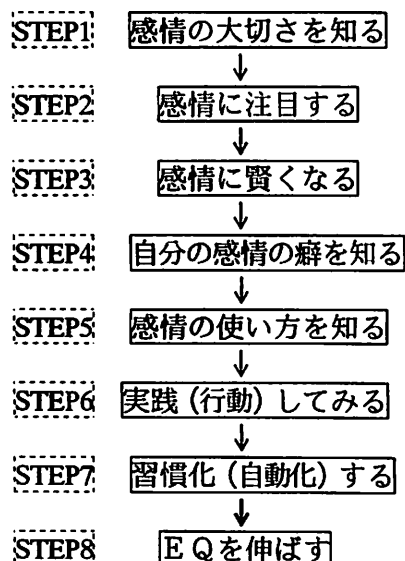


図10 EQ開発の考え方

表13は、それを基に考案された、短時間でできる指導例を紹介したものである。

「学活」や「朝・帰りの会」等を活用し、学級の実態に応じて実践していくことがよいが、日常生活の様々な場面に適用し実践させることで習慣化できると思われる。

表13 EQ向上に向けた指導実践例

エクササイズ名	期待される効果
1.人間ウッチソク	自他の感情の識別
2.今の気持ちは？	自他の感情の識別・感情表現
3.表情ジェスチャーゲーム	//
4.気持ちを表す言葉を知ろう！	正確な感情表現
5.ミラーソングゲーム	相手の感情への共感
6.友情の握手・拍手	//
7.一日一善	//
8.笑顔で挨拶・元気な返事	相手への共感・感情の特性理解
9.「ふわふわ言葉」と「チカチカ言葉」	// //
10.「聞き上手」「話し上手」になろう！	// //
11.1日10回ありがとう	感情の特性理解・感情の調節
12.シックスセカンズポーズ	感情の調節
13.3秒決断トレーニング	感情の調節

(4) 心に響く資料作成

心を癒しEQの向上を図ってもいじめや不登校を防ぐには充分とは言えない。子どもは不適切な行動を理解していてもその行為に至ってしまう傾向にある。

人格的にも未成熟で生活経験も十分ではないことから、しばしば、傷つけ合う子どもたちに、どのような働きかけが有効なのだろうか。

TOS S 道徳研究会では「心の教育」には「子どもの心に響く力のある資料」の必要性を説いている。力のある資料とは、すなわち、可能な限り大多数に対して、説得力のある共感できる、即効力のある資料ということである。

そこで、いじめや不登校についての事実に基づいた現実的で客観的な資料を作成し、活用法を工夫していくことで、より充実した指導を展開できるのではないかと考えた。

指導を充実させるためには、多くの実践例にもあるように、いじめや不登校の実態を生々しく紹介するだけにとどまらず、身近な事例を基に、いじめや不登校が抱える問題点への理解を深めさせることも大切である。

そして、様々な資料を活用して、その解決や未然に防ぐ方法をも考えさせる発展的な指導を展開できることが望ましい。

このような人権に関わる問題に対する指導を充実させ、且つ、事後の学級経営においても意義深いものにするためには、より多角的・多面的な指導法の工夫が必要である。

そのために、どの子にも当事者性を深められる題材選定と場面設定が必要不可欠となってくる。その点に十分配慮し、実践に臨むよう資料作成に取り組まなければならない。

多くの著書、インターネット等にも、いじめ問題に関する資料が多く紹介されており、指導資料としても活用できる題材は豊富にある。そこから、さらに学級の実態を加味して選定し活用することで、より説得力のある心に響く授業が展開できると考えられる。

(5) 教師の実践力向上

図11からもわかるように、「自信がない」「やや自信がない」等、いじめを解決できていないと感じている教員が3割もいることから、多くの教員がいじめの指導に不安を感じていることが伺える。多様化するいじめに、個人で対応するには難しいケースもあるとの指摘もあり、「校内研修の充実」「教育相談員とのいじめ対策推進」等、様々な対策により組織的に指導力強化を図ることが大切である。

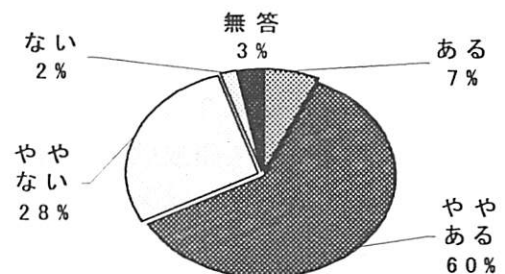


図11 那覇市内中学校教員対象

「いじめ解決への自信」

(平成19年10月 那覇市教委まとめ)

しかし、いじめや不登校の未然防止に向け、子どもを導き、より適切な行動へと結びつけていくには、指導法を工夫するとともに、教師が様々な資料を活用できる応用力や子どもと共感できる人間性を高めていくことが最も重要であると思われる。

いじめや不登校への取り組みは、子どものみならず周囲の大人も含めた人間関係を修正する「基本的人権尊重」への学びの場だと考えてもよい。そして、そこに関わる多くの支援者の中でも、日常的に子どもと接する機会が多いという立場から、教師が担う役割は重要で、周囲からの期待も大きい。

したがって、取り組みをよりよい方向へ導いていくためには、日常的に人権を意識しながら、子どもを取り巻く環境の変化に素早く気付き、誰に対しても安定的態度で接することができる、教師の実践力向上が不可欠だと思われる。

Ⅶ 授業実践（検証授業）

「未然防止に向けた取り組み」（2）から（4）を考慮した3つの授業を実施した。

実践1「心癒しを体験しよう」（第1時）

1 題材名「レッツ マインド アップ」

2 題材設定理由

小学校高学年では、女子の方に悩みを抱えている子が多く、男子には、ストレス耐性の低い子が多く見られる。また、学級所属意識の低い子もいる。そこで、集団づくりや相互理解に効果的なエンカウターのエクササイズの内容に体育的・音楽的活動を取り入れ、体を動かすことによる爽快感や開放感、協同で達成していく成就感等を体感させることで、心癒しを深め所属意識の向上を図れると考え本題材を設定した。

3 指導観

始めに、一斉に「体ほぐし」を行い、

次に生活グループに分かれての小集団でのエクササイズに変え、最後に男女別に分かれての競争型のエクササイズへと授業を展開していく。

4 本時の指導

(1)本時の目標

エンカウターのエクササイズを通して所属感や活動意欲を高める。





(2)授業仮説

音楽に合わせたダンスやふれあい、共同作業などを入れたエンカウターのエクササイズを行うことで心癒しが進み、児童の所属感や活動意欲を高められるであろう。

(3)使用する道具

CDラジカセ、新聞紙、笛、ストップウォッチ

(4) 本時の展開（12月20日 於：浦添小）

	学 習 活 動	授業の様子
始 め 10 分	1. ダンシングペーパー (1) 新聞紙を持って軽く走る (2) 新聞紙の動きを模倣する (図12) *動いた後、感想を発表する。	 図12 「ダンシングペーパー」
な か 30 分	2. リズム遊び (10分) *生活グループで輪になって座る 2～3人向き合って簡単なダンスをする *動いた後、感想を発表する。 3. 男女対抗ゲーム*男女に分かれて整列 (1) 馬跳びリレー (10分) *決められた地点の往復の速さを競う (2) 人間イスの輪 (10分) (図13) *できるだけ短時間で完成させるよう競う	  図13 「人間イス」の様子
ま と め 5 分	4. 感想を発表する (図14) *本時を総括した感想を発表する。	 図14 「授業のまとめ」の様子

実践2「EQを高めよう」(第2時)

1 題材名「レッツ センス アップ」

2 題材設定理由

高学年では、男女間で当番活動分担の件や給食分量などでしばしばトラブルが発生している。それは、ストレス対処への適切な行動に関する学習不足や情動のコントロールが上手にできていない為だと考えられる。これを、適切な行動へと導く力がEQ力であり、それを向上させることで、身近な人への理解も深まり、実践力も向上していくのではないかと考え本題材を設定した。

3 指導観

表13のEQ力向上への指導例の9.10.11を組み合わせたエクササイズの実験を通して、優しい言葉かけと感謝の気持ちによってよりよい人間関係が形成できることを体感させ、適切な行動への向上意欲を喚起するようにする。

はじめに、表12のパズルゲームを短時間でを行い全体の雰囲気や和らげる。次に、ありがとう

ゲームを行う。始める前に、実際例をもとに、優しい言葉かけや感謝の言葉の大切さについて理解させ活動意欲を高める。教師は進行役となり、短時間で区切って、テンポよく進めることが望ましい。

4 本時の指導

(1)本時の目標

相手の気持ちを考えた言動を身につけることの大切さに気づかせるとともに適切な行動への意欲づけを図る。

(2)授業仮説

ロールプレイングによって日常の行動を振り返らせることで、相手の気持ちを考えた言動の大切さに気づき適切な行動への意欲づけができるだろう。

(3)使用する道具

パソコン、プロジェクター、スクリーン、CDラジカセ、パズル、ストップウォッチ

(4) 本時の展開 (12月21日 於：浦添小 1月10日 於：神森小)


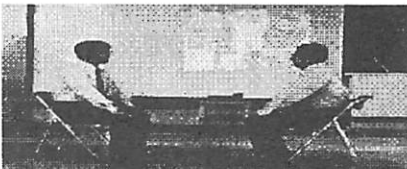

	学 習 活 動	授業の様子
始 め 10 分	1. パズル (1) はじめは相談しない会話しないで取り組む (2) 2回目は相談しながら取り組む (図15) *動いた後、感想を発表する。	
な か 30 分	2. 不思議な水の話を知る (感謝の言葉や優しい言葉の大切さを知る) 3. ありがとうゲーム (15分) *生活グループで *教師の模擬演技を見てグループで行う (図16) (1人ずつ、全員終わるまで) (図17) ①考える時間(よいところ探し) 30秒 ②伝える時間1分(時間内にできるだけ多く言う)	
ま と め 5 分	4. 感想を発表する (図18)	



図18「授業のまとめ」の様子



図17「ありがとうゲーム」の様子

実践3 「いじめについて考えよう」(第3時)

1 題材名「NO MORE いじめ」

2 題材設定理由

様々な実態調査から、殆どの子が、いじめはいけないことと感じており、いじめが無くなることを願っている。しかし、毎年多くの子がいじめに巻き込まれ苦しんでいるのも事実だ。理解できているが実践できていないということである。

そこで、いじめのことを多角的に捉え、いじめについての理解を深めさせるとともに、いじめを防ぐ方法を共通理解させる必要があると考え、本題材を設定した。

3 指導観

いじめへの理解を深めさせるためには、被害者、加害者、傍観者、それぞれの立場の気持ちを捉えさせることが大切である。それぞれの気持ちへの理解の深まりからいじめの構造を捉えさせ、さらに、いじめに巻き込まれない方法も導き出せるようにしたい。

そのための資料として、導入部分では、全国的な傾向や学級の実態等を交えたスライドを活用し、いじめについて視覚的に捉えさせ、深める場面では、いじめの態様で最も多い「集団での無視・仲間はずれ」の事例を活用し、当事者

性を高められるようにしたい。

また、いじめを解決した事例を紹介しいじめへの対処法を学ばせるとともに、いじめに巻き込まれないような強い意志を持つことの大切さを印象づけ、協力していじめを根絶しようとする意識を高められるようにしたい。

4 本時の指導

(1)本時の目標

いじめの被害者、加害者、傍観者それぞれの気持ちを考え、いじめの構造やいじめを解決するための関わり方への理解を深め、いじめ防止への意識を高める。

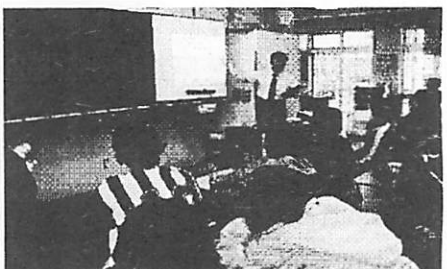
(2)授業仮説

- ① いじめの具体例を用いて実際の場面を想起し考えさせることで、児童の当事者性が高まり、各立場の気持ちの理解を深められるであろう。
- ② いじめ解決に向けた関わり方について学ぶことで、身近な問題に対して自分なりに解決していこうとする意欲が高まり、いじめ防止への意識を高揚できるであろう。

(3)使用する道具

パソコン、プロジェクター、スクリーン、マジック
いじめの事例の絵、短冊シート(5色)

(4) 本時の展開 (2月8日 於：浦添小 1月17日 於：神森小)

	学 習 活 動	授業の様子
気 づ く 5 分	<p>1. 全国のいじめの実態を知る。(平成18年度) * 全国から多くのいじめが発生していることを知る</p> <p>2. いじめの定義を知る。(図20) 被害者がいじめられていると感じたら「いじめ」である</p> <p>3. いじめの態様を知る。(6例) (1)ひやかし・からかい (2)集団無視・仲間はずれ (3)暴力 (4)脅し・たかり (5)いやがらせ・物隠し (6)メール等での誹謗中傷</p> <p>4. 学習課題を知る。 いじめについてみんなで考えよう</p>	 <p>図20 授業の様子1 (1月17日 神森小)</p>

5. いじめの「加害者」「被害者」「傍観者」「親・教師」の気持ちを考える（場面毎に考えワークシートに記入する）

* 「集団無視によるいじめ」の事例で考える。

場面① いじめの始まりのグループ内での無視

（いじめの中心のA子，加害者の気持ち）

場面② いじめが広がり学級全体での無視

（学級内の周囲の子，傍観者の気持ち）

場面③ 不登校になった

（いじめで不登校になったB子，被害者の気持ち）

場面④ 母親が先生に相談に行った

（母親や先生の気持ち）

6. それぞれの気持ちを発表する。 （図 21）

7. （1万3千人の声から）を見る。

「いじめられていた人の対応」「見て見ぬふりをした人の気持ち」「いじめに加わった人の気持ち」を過去の事例から知る。

8. いろいろな方法で解決していった話を聞く。

解決例 1 （先生に相談して解決できた例）

解決例 2 （友だちの「やめよう」の一言で無くなった例）から解決するための方法を知る

9. いじめを苦に自殺した事件の話を聞く。（1例）
最も悪い結果の事例からいじめの犯罪性について認識する （図 22）

10. いじめは許されないことを再確認する。

11. いじめをなくすにはどうすればいいか考える。

* 身近にある「いじめ発生の危険性」から発生を防ぐ方法を考える

（1）いじめにあったとき（2）いじめに気づいたとき（3）意地悪したくなったとき

12. 本時の感想を書いて発表する。 （図 23）

13. いじめに対するいろんな人の考えを聞く
（古賀さんや小中学生からの手紙から）

* 資料 6 の「新聞への小中学生の投書」



図21 授業の様子 2

（2月8日 浦添小）

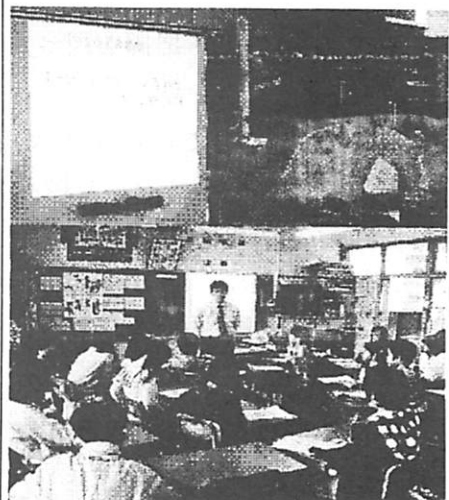


図22 授業の様子 3

（2月8日 浦添小）



図23 授業の様子 4

（1月17日 神森小）

VIII 研究の考察

1 作業仮説1の検証

いじめや不登校の実態把握や理論研究を基に指導資料を作成し活用することで、学級指導や個別指導のよりよい支援の在り方が導き出せるであろう

(1)手だて

- ① 文部科学省が11月に発表した全国の実態調査の結果から、いじめや不登校の傾向の把握を行った。
- ② 図書資料によって理論研究を深め学級指導や個別指導の在り方を探った。
- ③ アンケートの実施及び考察を通して、学級の実態把握を図った。

(2)結果

手だて①により、いじめや不登校の全国的な傾向や様々な態様への対処方法及び未然防止の方法を知ることができた。

手だて②により、いじめや不登校に対するよりよい対処方法やカウンセリングのあり方、エンカウンター必要性、EQ開発プログラムの活用方法等を知ることができた。

手だて③により、アンケート資料の活用方法について理論を深めることができた。

(3)考察

理論を深めることでそれぞれの手だてを得られたことや、それによって導き出された様々な方法を、作業仮説2に生かすことができた。

授業実践1では、表12の構成グループエンカウンターを、授業実践2では、表13のEQ開発プログラムを、それぞれ、手だて①②③に基づいて、指導法を工夫し取り入れることができた。

また、全国の実態や学級の実態、これまでの実践例等を基に、いじめの未然防止に向けた学級指導の指導資料を作成し、授業実践3に生かすことができた。

授業実践後の児童の感想(表14-16)からもわかるように、詳細な実態把握や理論研究の深まりによって、実態に即した指導資料を作成し指導法を工夫できたことが、子どもたちの気持ちの変容を導き出せたと考えられる。従って、作業仮説1は効果的であったと思われる。

表14 授業実践1の児童の感想(集約)

- ・楽しかった。もっとやりたい。
- ・協力してできてよかった。
- ・協力の大切さがわかった。
- ・工夫してできてよかった。
- ・チームワークもよくなってよかった。
- ・自分達でもやってみたい。
- ・いい運動になった。
- ・笑ってできた。気持ちよかった。
- ・時間が短く感じられた。
- ・他のものもやってみたい。

表15 授業実践2の児童の感想(集約)

- ・いいところを言われてよかった。
- ・優しい言葉を使うようにしたい。
- ・褒め言葉を使うようにしたい。
- ・自分の良さに気づいた。
- ・恥ずかしかつたけどできた。
- ・ほめるのは難しい。
- ・いいところが言えてよかった。
- ・相手の良さを見つけられてよかった。
- ・これからはありがとうと言うようにしたい。

表16 授業実践3の児童の感想(集約)

- ・いじめに気がいたら助ける。
- ・いじめはいけない。したくない。
- ・いじめが無くなるといい。
- ・みんなが楽しく生活できる平和な社会にしたい。
- ・いのちを大切にしたい。
- ・いろんな人の気持ちがわかった。
- ・前にいじめたことがあったけど、やってはいけないことだと気づきました。

2 作業仮説 2 の検証

学級活動で、エンカウンターの方法を用いたり、作成した資料を活用した積極的な学級指導を展開することで、互いを理解し他者と関わり合おうとする態度が育つであろう

(1) 手だて

- ① 心癒しへのアプローチの方法として構成的グループエンカウンターを取り入れ授業実践1を行った。
- ② EQ向上の方法として、優しい言葉で互いに認め合う「ありがとうゲーム」を授業に取り入れ、授業実践2を行った。
- ③ いじめや不登校に対する学級指導の具体例として、いじめの具体的場面を設定し、授業実践3を行った。

(2) 結果

児童の感想(表 14~16)にも表れているように改善意欲の高まりが見られた。指導後の活動においても、丁寧な言葉かけを心がけている様子が見られることから、友だちと協力して活動することの大切さや優しい言葉遣いの重要性に気づき、改善しようとしている子が増えている。

また、これまで個人行動が多かった子が、周囲の子の働きかけによって集団で楽しく過ごすようになってきている。さらに、自他の良さに改めて気づけてよかったという感想もあるように、授業後は、男女間の仲も良く子どもたちの表情も明るい。

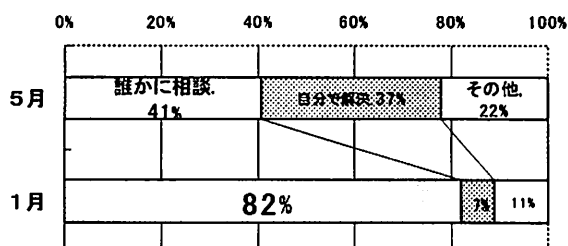


図24 解決方法の変化

(5月：悩んだとき)

(1月：いじめられたとき)

図24は、5月と検証授業実施後の意識を比較したものであるが、5月に比べて他者との関わりを意識するようになった子が増えている。

(3) 考察

授業後の結果から、自他の良さや協力して活動することの大切さに気づき行動を改善しようと心がけている子が増えていることから、自尊感情や他者理解への高まりがあったと思われる。

また、言葉遣いへの関心の高まりも伺えることから、EQに対する意識の向上もあったと思われる。

加えて、仲間はずれを出さないように働きかける子が見られたことや他者との関わりを意識する子が増えていることから、作業仮説2は効果的であったと考えられる。

IX 研究の成果と課題

1 成果

- (1) いじめや不登校の実態把握や理論研究を基に指導資料を作成し活用することで、学級指導や個別指導のよりよい支援の在り方が導き出せた。
- (2) 学級活動で、エンカウンターの方法を用いたり、作成した資料を活用した積極的な学級指導を展開することで、互いを理解し他者と関わり合おうとする意識づけができた。

2 課題

- (1) 特活と道徳を関連づけた年間指導計画の作成
- (2) アンケート作成とその活用法の工夫・改善
- (3) 地域・学校・学級の実態に応じた資料作成の工夫
- (4) 指導法の工夫・改善

【終わりに】

学級経営目標の第一番目に掲げていることが、「誰もが安心して活動できる学級にすること」で、これまでの実践の中でも幾度となく葛藤を繰り返し、指導法を工夫しながら取り組んできました。

しかし、ここ数年は、生活指導や生徒指導の工夫・改善の必要性に迫られながらも、充実できないままに終えていた感があります。

教科指導に於いても同様に、児童の実態に合わせた細かな指導が求められ、学校・学年間で連携し支え合いながら実践してきましたが、十分であったとは言い難いところです。

そこで、自分に必要なこと、教師としての資質、教育観等改めて問いただし、これからの時代を担う人材育成に貢献できればと考え、研究所への入所を決意し応募しました。

入所して最も感じたのは、これまで学ぶ機会を逃してきた自分自身への嫌悪感でした。

所内の図書・資料室にある多くの書物に触れながら、学問の奥深さを痛感させられる毎日でした。

研究を進める過程で、それに気づくことができ、それが一番の成果だったのかも知れません。

正に「無知の知」です。

今、私は、学問への探求心が薄れていたことを反省し、向上心を強く持って生きようと決意を新たにしているところです。

期間中、何かとご指導・ご支援頂いた宮城むつみ所長を始め研究所の先生方、職員の皆様、指導助言頂き研究の方向性を示して頂いた浦添市教育委員会の相澤先生、青少年センターの山内先生には心から感謝申し上げます。

また、多忙な時期にもかかわらず、ご理解いただきこのような機会を与えてくださった神森小学校の新川校長先生をはじめ同校職員の皆様、検証授業にご協力頂いた浦添小学校の職員の皆様、その他、研究に関わって頂いた多くの方々に対し厚く御礼申し上げます。

今後は、ここで学び培ってきたことを現場でも検証しながら、日々精進していきたいと考えています。

最後に、半年間、支え合い励まし合い共に学んだ36期研究員の先生方、大変お世話になりました。有難うございました。

<主な参考資料・引用文献>

・小学校学習指導要領 第3章道徳、第4章特別活動	文部科学省	1998年
・平成18年度生徒指導上の諸問題の現状について	文部科学省	2007年
・「いじめ対策Q&A」	文部科学省 子供を守育てるための体罰づくりのための協議会議	2007年
・「平成19年度指導努力事項」	沖縄県教育委員会	2007年
・「EQ こころの知能指数」	ダニエル・ゴールマン著、土屋京子訳 講談社	1996年
・「EQ こころの鍛え方」	高山 直 東洋経済新報社	2004年
・「動作療法」	成瀬悟策 誠信書房	2000年
・「こころの真相」	木田恵子 太陽出版	1998年
・「心理テスト法入門 第4版」	松原達哉 日本文化科学者	2002年
・「教室の悪魔」	山脇由貴子 ポプラ社	2006年
・「心の傷が治った」	織田尚生・網谷由香利 第三文明社	2003年
・「ノーモアいじめ」	サンケイ新聞「いじめの構造」取材班 日本教育新聞社	1986年
・「なぜボクはいじめられるの」	朝日新聞社社会部 教育資料出版会	1995年
・「どんな学級にも使えるインカウター-20選」	明里康弘 図書文化社	2007年
・「力のある資料」で心に響く道徳の授業を創る！	向山洋一 明治図書	2004年